



## 山中に穴掘り暮らした男の二〇〇日

かつて私の家は宿坊のかたわら商店を営業しており、絵葉書も販売していた。最近目にすることの増えた、“大正時代”や“昭和時代”の話である。そんな記録に残さないまま記憶が失われつつある時代の絵葉書について調べ眺めていると、ふと不思議な語句に目を引かれる。

### 「御嶽山上に於ける穴居生活」

写真には三角屋根の建物。別の御岳山だろう。だが、同じ建物を写す絵葉書には「武蔵國御嶽山村井弦齋先生の居穴」とある。この御岳山だ。居穴とは？そして村井弦齋とは？

村井弦齋（むらいげんさい）。本名は寛（ゆたか）。文久三年（一八六四）生、昭和二年（一九一七）没。愛知県三河の武家出身。明治維新後に上京し英才教育を受け、若くして渡米。帰国後はジャーナリスト、小説家、編集者と幅広く活躍した。何故このような文化人が御岳山中で穴居（けつきよ）することになったのか。その発端は、弦齋の「食」にまつわる探究心であった。

弦齋の代表作『食道楽』。明治三十六年（一九〇三）に発表された小説で、男女が食を通じて惹かれ合うお話、なのだが、物語に必ず料理が調理が食材の話がついてまわり、都合六百余种もの食物が登場する。連載時点で人気を博したが、単行本においては、調理や食材についての注釈、巻末付録に栄養分析表、メモ欄までついて、もはやレシジ本。この斬新さも受けてか大ヒットし、財を成した弦齋はありとあらゆる料理を食す美食家としても名を馳せる。ところがある時、食と健康の因果関係、病気の関心から、火を使わない生食、木や草を中心とする木食、いつそ食べない断食など、いわゆる「食

物療法」の類を取材し研究、自らを被検体として実践しはじめる。その末に目指したのが、自然のなかで自然を食して生きる。天然生活。その舞台として御岳山を選んだのだ。

入手したのは雑誌『婦人世界』。明治三十九年（一九〇六）に刊行された女性向け情報誌の草分け的存在で、主に料理や裁縫、流行のファッション写真や挿絵、連載小説やコラムなどが掲載される。弦齋はこの雑誌の編集顧問を勤めながら記事も執筆しており、大正十年（一九二二）二月号から「武州御嶽山に於ける私の山中生活」と題した連載をはじめた。その第一回の冒頭を要約してみよう。

（大正九年八月十二日。天然生活を望んだ私（弦齋）は、関東近郊の山々からまず交通の便の良い御岳山を選び、甥とともに宿坊「西須崎坊」へ赴いて話をしてみると、神社の許可も得てもらえた。翌日下山、十四日には道具一式を持って再登山、テントでの山中生活をはじめたのだ」という。すべてが克明に描写されているとは思わないが、あまりにもスムーズ過ぎやしないか。弦齋が著名人であったとはいえ、未だJR御岳駅もケーブルカーもない、観光地として開かれる前の御神域の山で、こんなに都合よく事が運ぶものだろうか？

というわけで、ひとつ仮説をたててみる。当時、弦齋が住んでいたのは神奈川県平塚市。JR平塚駅南の海側、現在の八重咲町から松風町にかかる一万六千坪もの土地に庭園や畑を営み暮らしていた。その一部が村井弦齋公園として残っている。そんな白砂青松の平塚海岸と、紫幹菜（むらさきかんさい）の御岳山をつなぐものがある。「御嶽講」だ。当該読者の方には言うまでもないが、「御嶽講」は武蔵御嶽神社を崇敬する村単位などで結成される団体を指す。寛保四年（一七四四）には講の代表者が当社を参拝する「代参」が行われた記録があるが、その際、参拝者は五穀豊穡や講中安全の祈禱を受け、御師の宿坊に泊まる。別の時期には御師が講のもとへ訪れ、家々に御札を配って廻る。時代は変われど、この講と御師の往来が現在まで続いている。

さて、弦齋が訪れた「西須崎坊」。この西須崎こそ、現在も平塚周辺の御

紹介し、眺望や自然環境を美麗な表現で描き伝えた弦齋は、御岳山の近代史において、当山の知名度を上げ来山者を増やした人物と言っても過言ではないだろう。

ところで。そんな弦齋のもとを訪ねた人たちは口を揃えて、「こんな所にひとりで居らして気味が悪くありませんか」と聞いたそう。この御岳山中で「こんな所」呼ばわりされ、猛獣や天狗が出そうともいう不気味な場所。それは一体どこなのだろうか…。

次回「長尾の峰といふ處」へつづく。

（文：権欄宜 服部朋也）

△取材協力▽

西須崎坊蔵屋 当主須崎裕氏、通子氏

△主要参考文献▽

黒岩比佐子『『食道楽』の人村井弦齋』（岩波書店、平成十六年）

村井弦齋『武州御嶽山に於ける私の山中生活』『婦人世界』第十六巻

第二號〜第六號（実業之日本社、大正十年）

弦齋は約二百二十日もの間、山中生活を営みながら山々の散策や神事への参列、宝物殿の拝観などをして御岳山を満喫している。我が世の春を謳歌していた文化人が突然、山中で仙人のように暮らしているらしいという話は注目を集め、取材や野次馬もやって来た。それが新聞などに掲載され、口コミでも広まっていく。雑誌発行部数の増減については不明だが、すべて広告戦略の内だったのだろうか。ともかく、連載において神社の由緒や山の名所を



（右）武蔵國御嶽山 山中生活の先生井村